

# Glocal Tenri



7

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.12 No.7 July 2011

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
大震災— PTSD の癒し  
／深谷忠一 ..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (67)  
その他の文書⑩  
／安井幹夫 ..... 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (17)  
満州伝道関連史料①  
／深川治道 ..... 4
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (81)  
コンゴ伝道に見る異文化接触 [47]  
／森 洋明 ..... 5
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (31)  
宗教の救済力は“未来”から来る  
／金子 昭 ..... 6
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の  
民族誌学 (28)  
宣教教師の残した文化  
／井上昭洋 ..... 7
- ・ 現代ジェンダー論展望 (16)  
坊守問題が意味するもの  
／金子珠理 ..... 8
- ・ 天理スポーツ (14)  
天理スポーツ シンポジウム④  
／難波真理 ..... 9
- ・ アメリカ通信 (4)  
バークレー留学体験記：メロディに持  
ち上げられて  
／深谷耕治 ..... 10
- ・ 図書紹介 (61)  
『健康格差社会—何が心と健康を蝕むの  
か』  
／八木三郎 ..... 11
- ・ English Summary ..... 12
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 13  
宗援連第2回情報交換連絡会に出席／第238回  
研究報告会／出張報告：海外福祉事情（デンマーク）  
／第10回天理大学 EU 研究会「エコキャンパス  
宣言」について提案／平成23年度公開教学講座  
「現代社会と天理教」(2)／夏期特別講座「教学  
と現代VIII」のお知らせ

## 巻頭言

### 大震災— PTSD の癒し

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

東日本大震災発生の直後、ある大学院で PTSD [Post-Traumatic Stress Disorder—外傷後ストレス障害] を専門に研究している教授が、政府からの非常召集を受け、出張先から警察のパトカーと自衛隊のヘリを乗り継いで駆けつけました。その時、政府の要人たちは自衛隊が撮影した被災地の生の映像を見ていたのですが、損傷した遺体が散乱している凄まじい光景が続くので、誰もが画面を正視することができていず、ある女性関係などは、ずっと両手で顔を覆って、下を向いて震えていたそうです。日頃は自分たちが世の主役だと任じているような人たちですら、テレビの画面を見てブルブル震えている。そんな凄惨な情景が生で目の前にあったのですから、震災直後の現場にいた人たちが受けた衝撃・トラウマ [Trauma—精神的外傷] の大きさは、外部者には想像もつかないものだったと思います。

そこで、被災者や救援隊員などへの心のケアが大事になるのですが、実は PTSD はそう簡単には対処できない病なのです。一般的には、“衝撃的出来事の体験＝ PTSD 罹患” と思われていますが、現実的にはそんなに単純ではない。例えば、アメリカ精神医学会の DSM [精神疾患の診断・統計マニュアル] でも、PTSD の原因の規定は改訂版が出るたびに変更になり、最新第4版では原因の記述そのものがなくなっています。

つまり、原因が特定できない PTSD の治療は、試行錯誤の手探りでしか進められないのが現状なのです。例えば、この病気が最初に認知されたベトナム戦争直後には、心理的デブリーフィング [Debriefing—体験の内容や感情を聞き出す災害後のカウンセリング手法] が有効だとされましたが、現在ではそれはかえって症状を悪化させるとさえ言われています。昔は専門家が良しとした治療法が、時代が進んで 180 度評価が変わってしまっているのです。

さて、昨今の日本では、何事をするにも専門の資格が求められ、あらゆる分野で〇〇師・士を作ろうとしています。大学でも、宗教学科への入学者が減り、臨床心理や社会福祉を選択する学生が増えているように、宗教

活動をするのにも、世間一般の専門的知識を必要とするかのような雰囲気があります。

しかるに、例えば、医者でも名医は「手術は祈りである」と言うように、その道を真に極めている人は、誰でも人智・人力の限界をわきまえており、最後には神様に問題の解決を委ねます。つまり、“専門家に任せておけば悩みは全て解決する” などというのは、人間への過大評価であり期待過剰でしかないのです。ですから、大震災での PTSD の治療でも、所謂その道の専門家だけに任せておくのではなく、各々が神様のご加護を頂けるように努めることを忘れてはならないのです。

その一例として最近あった事例を紹介すると・・・筆者の教会の関係者がハワイのコナに出向いた時のこと、“おたすけ” を願ってきた大勢の人の中に、一人の 60 代後半の男性がいました。彼はコナでは知られた臨床心理士だそうですが、自身がベトナム戦争に従軍し PTSD にかかり、それによる強度の睡眠障害に悩んでいるというのです。そこで、会長が彼に“おさづけ” を取り次いだところ、その夜は何年ぶりかでグッスリと眠ることができた。それで大変喜んで、次の日もまた、ぜひ“おさづけ” を取り次いでもらいたいと朝からやってきたというのです。40 数年も続いた PTSD が、一度の“おさづけ” の取次ぎによって、鮮やかに癒されたということなのです。

PTSD に限らず、被災地の人々の様々な病や傷が癒されるように、医師やカウンセラーなどの働きを支える。それが、“医者の手余りを救ける” との御神言を戴く道の“よふぼく” の役目です。“おさづけ” は心身のいかなる病にも万能なのですから、この道の“よふぼく” はそのことを忘れずに、どんな人にも躊躇なく“おさづけ” を取り次がせて頂くことが大切だと思うのです。

災害救援ひのきしん隊などによる道の地均しに続いて、本教の救済の本筋である“おさづけ” 取り次ぎの輪を被災地に弘める。その上で、人がこの世で生かされ生きている意味—人生の目的や生き甲斐を伝えていく。それが、今、道の者に求められている最も大事な救援活動だと思う次第です。